

# 曖昧な性別違和をめぐるカテゴリーの形成

## ——「Xジェンダー」の運用に着目して——

東京大学大学院 武内今日子

### 【1. 目的】

本報告の目的は、特に関西のサークルに着目して、性別違和をめぐるカテゴリーの配置と語りの場のあり方が、性同一性障害医療が整備されるなかでどのように変容していくか探り、その中で生じたXジェンダーなどの曖昧な性のあり方を指すカテゴリーが人びとの経験にいかなる可能性をもたらしたのか明らかにすることである。先行研究では、性同一性障害コミュニティにおいて外見上“パス”する“正当な当事者”たれと駆り立てる医学的規範や、その背後にある男女を一瞥で見分ける性別秩序が描き出されてきた（鶴田 2009）。そこから零れ落ちるような、カテゴリーからのズレを感じる人びとの自己像や（石井 2018），“男でも女でもない”Xジェンダーを名乗る人びとをめぐる日本社会の困難な状況も記述されている（Dale 2013）。本研究はこれらを引き継ぎつつも、正面から論じられていない曖昧な性別違和をめぐるカテゴリーの形成と運用のあり方を、具体的な語りの場から描き出していく。

### 【2. 方法】

文献とインタビュー・データを分析した。対象とした文献は、1990年代後半を中心とした、性別違和に関する記載のあるサークルのミニコミ誌や商業誌の記述である。加えて、性別違和を経験したことがあり、Xジェンダーが用いられていた場に関わったことのある人たちに半構造化インタビューを行い、現在からの語り直しを含めて性別違和をめぐる状況を多層的に把握した。

### 【3. 結果】

性同一性障害（GID）がガイドラインに沿った医療として整備されていくなかで、語りの場を秩序づける様々なカテゴリーが名乗られるようになったが、それらの二値的な性別移行概念から差異化される形でFTX・MTXというカテゴリーが名乗られるようになる。この自己執行には、場を取り仕切る立場の人の非典型性やパフォーマンス、性科学に裏打ちされた曖昧な性を肯定する声かけといった局所的な要素が影響していた。GID概念が普及すると、病者という位置づけに負の意味を読み取る人たちが新たな語りの場を形成し、Xジェンダーもその場で多く名乗られるようになる。同時期にインターネット上で、曖昧な性を許容するような諸カテゴリーが名乗られるネットワークがつけられていたことも、この名乗りを支えていた。

### 【4. 結論】

以上から、医療や生き方をめぐる対立など特定の語りの場の文脈と、インターネット上でのカテゴリー運用とが影響し合って、Xジェンダーというカテゴリーが広まっていったことが明らかになる。当日は、語りの場の文脈における名乗りと、未規定性ゆえに現在個々に意味づけられるXジェンダーという名乗りとの間に生じる齟齬についても考察を試みる。

### [ 文献 ]

Dale, S.P.F., 2013, “Mapping ‘X’: The Micropolitics of Gender and Identity in a Japanese Context,” PhD thesis, Sophia University Department of Global Studies.

石井由香理, 2018, 『トランスジェンダーと現代社会——多様化する性とあいまいな自己像をもつ人たちの生活世界』明石書店。

鶴田幸恵, 2009, 『性同一性障害のエスノグラフィ——性現象の社会学』ハーベスト社。